

6 分割後期・二次 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 澄んだ青空に白い軌跡を描きながら飛行機が飛ぶ。
- (2) 港湾で働く人々の仕事について授業で発表する。
- (3) 図書館で地域の歴史について詳しく調べる。
- (4) 初夏の風に吹かれて花が揺れる。
- (5) 芸術教室で郷土芸能を鑑賞する。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 長い年月をかけて海水が結晶化したガンエンを料理に使う。
- (2) 新しい製品を開発して、技術者としてのカブが上がる。
- (3) 生徒会長としてのキンベンな仕事ぶりが認められる。
- (4) 移動教室で訪れた果樹園のナシをお土産にする。
- (5) 畑で収穫したエダマメを入れてご飯を炊く。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

大学生の暖平は、父の文彦と母の桃子が経営する写真館の手伝いを頼まれ、お世話になった山下先生がいる小学校の運動会の様子を写真撮影している。

「今日は天気もいいし、暑くなりそうだから、写真撮影は大変な重労働になると思うけど頼むな。」

暖平は肩を叩かれた。

(1) 山下先生の言葉がおどしではなく、大変な一日になりそうだというのは、児童たちが入場してくる開会式と、その流れで行われたラジオ体操を終えた時点で感じた。

澄み切った秋晴れで運動会には最高の一日だが、重い一眼レフを二つ両肩からたすきがけにして、児童たちを追いかけ回しながら撮影する暖平にとっては地獄のような苦しみだった。

子どもたちは種目を終えるとテントの下に戻るの、少しは楽なのだろうが、暖平は出突っ張りになる。

小さく折り畳まれたプログラムを開いては種目を確認し、またポケットにしまうということを何度繰り返したことだろう。プログラムは暖平の汗と土埃であつという間にシナシナになって、折り目から破れてしまっている。

午前中のプログラムが半分終わる頃には、シャツもズボンも汗で濡れ切っていて、半袖のシャツの先から出ている腕は、日焼けで赤くなり熱を帯びている。

「こりゃやばいな。」

一つ種目を終えるたび、あと半分、あと四分の一でお昼、あと三つ、とカウントダウンして、自分を鼓舞する必要があったが、ようやく迎

えたお昼の時間も、暖平にとっては休憩時間ではなかった。

食事会場となつている体育館に行つて、家族でお弁当を食べている様子を撮影しなければならないのだ。

やつてみて驚いたのは、子どもの側から暖平の方に寄つてくることだった。

「ねえ、いつものおっちゃんじゃないの？」

と何人もの小学生に聞かれた。文彦は子どもたちの間でやはり人気があるらしい。

「いつものおっちゃんじゃないだよ、今日は。」

暖平がそう言うと、別にながかりするわけではないが、

「ふうん。」

とその場に立つたまま、何かを待つている様子の子がほとんどだった。文彦なら何かしらで盛り上げてくれるのだろうか。

暖平はどうしていいかわからず、

「じゃあ、写真撮ろつか！」

と声をかけるくらいしかできなかった。

(2) もう一つ驚いたことは、どの種目についても、どこからどんな写真を撮ろうというプランが自分の中にちゃんとあったことだった。

「これはあそここの位置から、こう狙った方がいいな。」

そう感じるとすぐに走つてそのポイントに移る。

そこで思ったような画が撮れなければ、すぐに移動して、思い通りの構図を探すのだが、大体どこに移動すればいいのかわかるのだ。

それはかつて自分が撮ってもらつて嬉しかった写真の構図だということに暖平は気づいている。

小学校だけじゃない、中学、高校とイベントのたびに父親がそこに

いるのは、嫌で仕方がなかったが、その仕事の仕方、つまりカメラマンとしての父の動きは見えていないようでこれまでずっと見てきたのだ。

シャッターを切り続ける暖平は、

「この写真は喜ぶだろうなあ。」

と思うと徐々に嬉しくなり、低いアングルから狙うためにグラウンドに腰を下ろしたりしているうちに、汗で濡れた洋服にグラウンドの土がついて、気づけば真っ黒になっていた。

運動会が終わつて家に戻ったときには、腕も顔も首筋も日焼けで

真っ赤になっていた。

「疲れたでしょ。お疲れ様。」

(3) と桃子に言われたが、

「いや、別に。」

と暖平は答えた。

本当は疲れ切つていたが、先に家に帰つて撮つてきた写真の選別をしている文彦が、何事も無いような顔をしているのを見て、疲れたと言つたら負けのような気がしたからだ。

ただ、父親がやってきた仕事を初めてやつてみて、こんな大変なことをいつもやっているんだということがわかったことは、暖平の心に少なからず変化をもたらした。

自分や姉を育てるために、この重労働を「当たり前」のように日々こなし続けてきたのだ。

もちろん今も自分が大学に行くためにその当たり前を続けてくれている。

〔4〕「ありがとう。」

という言葉を言うのは照れ臭く、とてもそんなことを言い合える親子関係ではない。

暖平は二台のカメラを差し出して、

「俺なりに、頑張つていいショットを撮ってきたつもりだけど、あまり売れなかつたらごめん。」

と言いながら渡した。

「ご苦労さん。売れなかつたっていいのさ。運動会に拍手と応援が戻ってくれば。」

文彦はそう言いながらカメラを受け取ると、それはそのまま机の上に置いて、先ほどまでやっていた自分が撮ってきた写真の選別作業を続けた。

その学校の保護者が閲覧して、気に入った写真があったら買えるという、インターネットを利用したシステムに、自分が撮ってきた写真を登録しているのだ。

それが終わったら、暖平が撮ってきた写真もチェックするのだろう。

暖平は、その作業を待たずに文彦の作業場から出た。

「俺、風呂入ったらすぐ帰るから。」

文彦の背中にそう告げると、

「ああ。ありがとな。バイト代は成功報酬な。」

と文彦はいつものように無愛想に言った。

「別にいらないよ。」

暖平はそう言うのと浴室に向かった。

桃子からは、

「泊まっていけば?」

と言われたが、明日は限から授業がある。今日中に帰らなければならなかった。

桃子が高崎駅まで車で送ってくれた。

「今日はありがとね。父さん、本当はすごく嬉しそうだったんだよ。」

そんな話をしてくれたが、

〔5〕「うん。」

とだけ返事をした。文彦のその気持ちは暖平もわかっているつもりだ。

（喜多川泰「おあとがよろしいようで」による）

〔問1〕 (1) 山下先生の言葉がおどしではなく、大変な一日になりそうだというのは、児童たちが入場してくる開会式と、その流れで行

われたラジオ体操を終えた時点で感じた。とあるが、この表現に

ついて述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 運動会を成功させるために必死になっている山下先生の様子を、

先生の言葉を繰り返し情緒的に描くことで表現している。

イ 並々ならぬ緊張感が漂う児童の様子を、開会式からラジオ体操に

至る児童全体の動きを躍動的に描くことで表現している。

ウ 撮影の仕事の過酷さを早い段階で予感している暖平の様子を、運

動会の開会式とラジオ体操を説明的に描くことで表現している。

エ 滞りなく撮影の仕事を進めようとする暖平の様子を、流れるよう

なプログラムの進行を象徴的に描くことで表現している。

〔問2〕⁽²⁾ もう一つ驚いたことは、どの種目についても、どこからどんな写真を撮ろうというプランが自分の中にちゃんとあったこと

だった。とあるが、暖平が「プランが自分の中にちゃんとあった」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 何人もの児童から話しかけられ、父は会話しながら撮影していたことを思い出し、自分から児童に声を掛ければよいと気付いたから。

イ かつて、自分が何気なく見ていた父の写真の構図やカメラマンとしての動きを、無意識のうちに理解し身に付けていたから。

ウ 狙った写真が撮れるように、直観的に移動を繰り返しながらポイントを修正し、いい写真を撮る技術が身に付いていったから。

エ 学校のイベントのたびに、父が撮影に訪れることに反発しており、より洗練された動きを求めて自然に体が動いていたから。

〔問3〕⁽³⁾ 「いや、別に。」とあるが、このときの暖平の気持ちとして最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 仕事を頼んでおきながら、何事もないような顔をしている父を見て、礼を言われるまで黙っていようと意地を張る気持ち。

イ 腕も顔も首筋も日焼けで真っ赤になり、疲労が明らかで自分に向かって、お疲れ様と言う母に対して反発している気持ち。

ウ 疲れ切った父が、黙々と次の仕事をする姿を見て、自分は疲れたことをおおげさに主張しないようにしようと配慮する気持ち。

エ 父がしてきた仕事を初めて体験し、激しい疲れを感じて帰宅した自分と違い、疲れを見せない父の姿を見て強がる気持ち。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「ありがとう。」とあるが、このときの暖平の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分が撮った写真の選別を当たり前のように引き受けてくれた父に対する感謝を抱いているが、直接言えない様子。

イ 自分なりにいい写真を撮ってきたつもりではあるが、父のようには売れないことを感謝でごまかそうとする様子。

ウ 自分や姉を育てるために長年大変な仕事を続けている父に対して感謝を抱いているが、素直に言えない様子。

エ 今も自分を大学に行かせるために父は重労働を続けていることを実感し、思わず感謝の言葉を漏らした様子。

〔問5〕⁽⁵⁾ 「うん。」とあるが、このときの暖平の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 本当は喜んでいっているという父の気持ちは自分も気付いているということ、簡潔に返事することで母に伝えようとしている様子。

イ バイト代を断った自分の気持ちは父も分かっているということ、思い切りよく返事することで母に伝えようとしている様子。

ウ 父の気持ちを代弁する母の気持ちは理解しているということ、冷淡に返事することで母に気付かせようとしている様子。

エ 父の心情を全て理解している母に感心しているということ、穏やかに返事することで母に気付かせようとしている様子。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

温暖で降水量が多い東アジアから東南アジア、南アジア東部地域は、モンスーンアジアと呼ばれている。モンスーンとは季節風のこと、夏には海から陸へ吹く大量の水分を含んだ風が、大量の雨をもたらす。モンスーンアジアは年間降水量が一〇〇〇ミリ以上の地域と定義されているが、二〇〇〇ミリに達する地域も多い。この地域は、地球上の陸地の一四パーセントしか占めていないが、世界人口の約半数を抱えている。主食が米であるという共通点は単なる偶然ではない。イネは小麦や雑穀類と比べて高い気温と日射量が必要とする熱帯から亜熱帯、暖温帯に適応した植物である。また水稲栽培は、文字どおり水の安定確保が前提となる。モンスーンアジアの気候は、まさに水稲に適している。(第一段)

水稲が大変収量が高い作物であることは古くから知られていて『国富論』を記したイギリスの経済学者であるアダム・スミスは、小麦に比べてはるかに大量の作物を生産すると述べている。単位面積当たりの収量で見ると米は小麦の二倍にもなる。そのおもな理由は、水稲は水をべースに生育する点にある。水中にはリンが可給態と呼ばれる植物に吸収されやすいイオンの状態で存在する。一方、乾いた土ではリンの多くは鉄やアルミニウムと結合し、植物が吸収できる可給態のリンに乏しい。(第二段)

米は多くの畑作物と違い、連作できるといふ利点もある。稲作が毎年同じ場所で行われているのはよく見る光景であるが、畑作物ではそうはいかない。トマトやナス、キュウリなどの野菜は、同じ場所で繰り返し育てると病気の発生や栄養不足による発育不良が生じる。これは連作障害と呼ばれる、古くは厭地いんちとも呼ばれていた。中世のヨーロッパでは、連

作障害を避けるため、小麦を数年耕作した場所では、そのあと五年ほど休耕し、耕作場所をローテーションしてきた。中学や高校の社会で習った三圃式農業さんぼしきのうぎょうは、それより少し後に登場した集約的な農業であるが、それでも三年に一回の休耕を余儀なくされた。(第三段)

では、水田稲作はなぜ休耕の必要がないのだろうか。⁽¹⁾その秘密はやはり水中にあるようだ。まず、流れがなく温度が高い水田の水中は、酸素に乏しい嫌気環境になり、連作障害を引き起こす好気性(酸素を必要とする)微生物が死滅する。また、水中では嫌気性の微生物の発酵作用により、有機物の分解が促進され、植物が利用できる養分が随時補給される。さらに、水田で発生するラン藻類が空気中の窒素を固定し、それが水田土壌に蓄積され、イネの養分になっている。要するに、田んぼの水環境がイネを病害から守り、かつ養分不足を補っているのである。(第四段)

面積当たりの生産量が多く、しかも連作できるといふイネの優れた特徴は、農業経営や土地利用にも大きな影響を与えた。農業経営の規模が日本と西欧とではまったく違うことはよく知られている。二〇一五年の統計によれば、日本の農家一戸当たりの農地面積はおよそ二・五ヘクタールであるが、ドイツやフランスでは六〇ヘクタールにもなり、二〇倍も大きい。この違いは、平坦な地形で大規模な機械化が進んだことが大きな理由であるが、機械化が進むはるか前の一七世紀から一八世紀においても、やはり五倍ほどの違いがあった。これには、社会制度の違いも関わっていただろうが、やはり米と小麦という作物の違いが大きいと思われる。米では、面積当たりの生産量が二倍多いこと、連作が可能で休耕地を必要としないこと、この二つが狭い農地面積でも生活や経営が成

り立っていたことを示唆している。(第五段)

水田稲作が盛んなモンsoonアジアの国々でも、おしなべて経営面積は小さい。少し古い記録であるが、一九五〇年頃の韓国、中国南部、インドのボンベイ、フィリピンのいずれの国でも、一戸当たりの農地面積は一、二ヘクタールだった。当時の日本の経営面積もほぼ同程度である。文化も宗教も社会体制も、そしておそらく地形の制約条件も異なる地域で、こうした類似性が見られることは驚くべきであろう。⁽²⁾その背景に、水田稲作の生産力の高さがあつたと考えるのはごく自然である。(第六段)

アジアでは一戸の農家が所有する農地面積が狭いだけでなく、田畑一枚(あるいは一区画)の面積も小さい。以下、これを圃場ほじょうと呼ぼう。最近の調査によると、日本、中国、韓国などの国々は、圃場サイズが小さく、全農地の約七割が〇・六ヘクタール以下の小規模なものである。傾斜地に広がる棚田では、〇・一ヘクタールほどの小規模のものも珍しくない。それに対し、北米やオーストラリアはもちろん、ヨーロッパでも一〇ヘクタール以上の圃場が多く、〇・六ヘクタール以下の農地はごくわずかしかない。(第七段)

圃場サイズが小さいということは、それを取り囲む畔あぜや土手があちこちに存在することを意味している。面積が小さいほど、その周囲長が相対的に長くなるからである。平坦な場所では畔の幅はごく狭いが、傾斜地では高低差がある土手が広がり、そこには草地ができる。大きな土手では、幅七から八メートル、長さ五〇メートル以上の草地が圃場と圃場のあいだに存在している。農地の畔や土手の草地の面積を足し合わせると、全国の草原面積のじつに四割近くを占めているという試算もあ

る。日本の里山では、緩やかな傾斜地に多数の農地と草地が組み合わせつたモザイクが必然的に成立しているのである。(第八段)

農家が経営する農地面積が小さければ、農地全体にも多様性が生まれる。圃場で何を作付けするかが農家ごと、あるいは圃場ごとに異なるからである。ある圃場は水田にし、別の圃場は畑にするかもしれない。そうした圃場の利用様式の違いは、里山景観のモザイク性をいっそう際立きわだたせることになる。秋にソバを作付けする地域では、白いソバの花が咲き乱れる畑と、稲穂が黄金色に色づいた水田とが、モザイク状に配置している美しい光景を見ることができ。(第九段)

子どもの頃、近所の原っぱにはバツタがたくさんいた。雑木林に行けばカブトムシやコクワガタ、ときには巨大なシロスジカミキリもいた。桑畑にはカマキリやクワコ(野生のカイコ)、田んぼにはミズスマシやタニシ、トノサマガエル、土手にはノカンゾウやクサボケが咲いていた。段丘崖をくだったところにある溜め池には、三〇種近いトンボがいた。家のヤナギにコムラサキの幼虫がいたことも、クロマツにアカモズが巣作りをしたこともあつた。初秋になると庭のベンケイソウにウラギンヒヨウモンやミドリヒヨウモンが飛んできた。早朝には電線でクロツグミが毎日のように囀なげっていた。私の家は段丘面の住宅地にあり、のどかな里山とは言えなかつたように思うが、それでも多様な生き物がいたことは確かである。(第十段)

景観のモザイク性が高いことは、比較的狭い範囲に多様な生態系が詰まっていることを意味している。多様な生態系があれば、景観全体ではそれぞれの環境に適応した種が棲すめるので、生物の多様性が高くなるの

は必然である。だが、モザイク性の効果はそれだけではない。⁽³⁾ かなりの生物は、ある特定の生態系だけで生活を完結しているわけではなく、複数の生態系を必要としている。たとえば、カエルは幼生期にはオタマジャクシとして水中で暮らすが、変態して成体になると陸上で暮らす。ニホンアカガエルやヤマアカガエルは、早春に水田で産卵し、幼生期として六月頃まで水田で暮らし、変態して成体になると上陸して森林へ移動する。森林の地上で数年間過ごし、性成熟すると水田に戻ってきて産卵する。なので、森林と水田の組合せがないと生活をまっとうできない。また、水田と森林があっても、移動障壁ができると棲めなくなる。^(第十一段) 農業の近代化で、水田の脇にある水路がコンクリートの三面張りになると、いつの間にかアカガエルがいなくなるという報告がある。アカガエルはアマガエルのように指先に吸盤がないので、コンクリートの大きな水路に落ちると垂直な壁をよじ登れず、下流に流されて溺れ死ぬか、水路に水がなければそのまま死んでしまうからだ。見た目の環境に変化がなくても、ちよつとした環境改変で、生き物は姿を消すという事例である。^(第十二段)

(宮下直「ソバとシジミチョウ」(一部改変)による)

〔注〕 三圃式農業——農地を三分割し、交替させて行う作付け方式。

〔問1〕⁽¹⁾ その秘密はやはり水中にあるようだ。とあるが、このように

筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 水田稲作で休耕の必要がないのは、水中の微生物の発酵作用により連作障害を引き起こす微生物を死滅させると考えているから。

イ 水田稲作で休耕の必要がないのは、水田がイネの病害を防ぐとともに十分な栄養を与える環境を成立させていると考えているから。

ウ 水田稲作で休耕の必要がないのは、季節風による大量の雨により水の状態を安定させる環境ができていると考えているから。

エ 水田稲作で休耕の必要がないのは、他の作物に比べて農地面積が広く多くの収穫が期待できると考えているから。

〔問2〕⁽²⁾ その背景に、水田稲作の生産力の高さがあつたと考えるのはごく自然である。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 地形の制約により農地は小さいが、複数の水田を所有することで多くの米が収穫でき、経営が成り立つと考えているから。

イ 西欧に比べて機械化が進んでいないので農地は小さいが、イネは少ない栄養で大きく育つため、経営が成り立つと考えているから。

ウ 水田は大量の水を蓄え、その水を生活に利用することができると、農地が小さくても生活や経営が成り立つと考えているから。

エ イネは面積当たりの収穫量が多く、同じ場所で繰り返し育てられるので、農地が小さくても生活や経営が成り立つと考えているから。

〔問3〕 この文章の構成における第十段の役割を説明したものと

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第九段までに述べた農地の景観について、異なる視点から筆者の経験を示すことで論の展開を図っている。

イ 第九段までに述べた農地の景観について、同じ視点から簡潔に要約することで結論を導き出している。

ウ 第九段までに述べた農地の景観について、多角的な視点から問題点を指摘することで論を分かりやすくしている。

エ 第九段までに述べた農地の景観について、科学的な視点から細かく分析することで異なる意見を紹介している。

〔問4〕⁽³⁾ かなりの生物は、ある特定の生態系だけで生活を完結しているわけではなく、複数の生態系を必要としている。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 多くの生物は、それぞれの種に適した環境で生きているため、多様な生態系があれば多様な生物が生存できるということ。

イ 多くの生物が、農業の近代化により改変された環境に適応するため、新たに生態系を構築しているということ。

ウ 多くの生物は、季節や成長段階などに応じて適した環境が異なるため、多様な生態系を求めているということ。

エ 多くの生物が、狭い範囲でそれぞれに適した生態系を作り上げているため、モザイク性の高い景観が生まれるということ。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「生物の多様性と人間の生

活」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、
、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

次のAは、小野小町に関する対談の一部であり、Bは、対談で述べられている掛詞かけことばについて書かれた文章である。また、Cは、A及びBで取り上げられた「古今和歌集（古今集）」にある小野小町の歌の原文であり、 内の文章は、その現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

高樹 * 小説には、私の思アう小町を書くのですが、『古今集』の十八首の歌の作られた順番もわかっていない。

小島 説はいろいろありますが、わかっていません。歌を頼りに小町像を作り上げるのは至難むづかの業わざです。

高樹 歌を読み込んで、その思いを私イの中で反芻はんそうしていると、「ああ、これはこのときだ」と思えてくるんです。

例えば夢の歌は前期にしました。そのころはストレートに気持ちを表現します。後期になると、掛詞などのテクニクを取り入れて、知識を駆使して歌を作っている。⁽¹⁾最後には直接的に詠よんだほうが伝わると、小町なりに学んだんじゃないかなという気がしました。

小島 おっしゃるとおり。『古今集』では紀貫之きのつらゆきをはじめとした編纂者へんさんが、恋一から恋五というパターンを決めて、そこに歌を入れていくので、小町の心の流れとは全然違う編集をしています。しかも詞書せしよも何もないから、いつ、どこで、どういう感じで作られたかもわかりません。

⁽²⁾ただぼんやりわかるのは、多分、掛詞が多用されていくのは、

明らかにひらがなの発達したときに、仮名文字が使われたからです。つまり、万葉仮名は漢字で表記しているので、掛詞はできないんですよ。一字一音だから。

高樹 なるほど。

小島 ひらがな文化は、だいたい九〇〇年代ちょっと前ぐらいなので、ちょうど小町が歌人として頭角を現していく時期と一致しているんですね。だから小町の夢の歌あたりは、その前です。

『古今集』も三部に分かれます。一部は唐風です。『小説小野小町百夜』でも出てくる小野篁おののたかむらとか、小町のおじいさん・小野永見おののながみとかは国際人で、中国文化を輸入して紹介した。それをとてもよきもの、立派なものとして、みんなが重きを置いていました。

でもその次に六歌仙の時代がやってきて、その六歌仙時代と、ひらがなが普及していくときが、だいたい時期が同じですね。

高樹 僧正そうじょう遍昭へんじょう、在原業平あひらのなりひら、文屋康秀ふんやのやすひで、喜撰法師きせんぼうし、小野小町、大友黒主おほともくろぬしの六人が六歌仙ですから。

⁽³⁾**小島** 小町もひらがなを使えるようになってからは、掛詞をたくさん使って歌を作っています。ひらがなの効用をおおいに楽しんだと思うんです。だけど、やっぱり小町は歌人だから、レトリック（ことを巧みに用いて効果的に表現すること）をくふうしながら、それよりも大事なのは心の表現だと思っていたはずですよ。

高樹 私、今、目からウロコだったのは、掛詞はかなの発展と関係しているんですね。

小島 かながなければ、掛詞にならない。

高樹 かなの前は万葉仮名だから、平安の最初のころは直接的な思いを詠うたった。

小島　そうです。『万葉集』の時代までは、序詞なんです。枕詞があった、序詞がある。枕詞がだいたい五音ぐらいまで、それを超えるフレーズになると序詞、万葉仮名であっても、それ全体で次の言葉を引き出すわけです。

高樹　だから三節ぐらいまでは、ただの序ですというのがいっぱいありますね。

小島　そうです。掛詞は、たとえば「あき」に季節の「秋」と「飽き」をかけるとか、「うきよ」に「浮世」と「憂き世」をかける。となると、ひらがな以外ではありえない。

高樹　「うき」も「あき」も耳から入ってきたものを、自分の中で文字を二つ想像して解釈する。

(高樹のぶ子、小島ゆかり「小町はどんな女」による)

B

掛詞、そしてそれをもととする縁語が同音異義の多い日本語の特性に根ざすことは、いうまでもない。それがすでに上代に淵源するものであることもたしかである。

けれども、掛詞・縁語が『古今集』に到って急激に盛んになったについては、それなりの決定的な理由があったはずである。それはまず、歌がすでに「書く」ものへと転生したことであり、しかもその表記が純然たる表音文字である平仮名に確定したことである。掛詞・縁語はアクセントを無視する。平仮名書きは掛詞・縁語を盛んにした不可欠の条件であった。

そういう意味からして、『古今集』における掛詞・縁語は上代のそれとは、一応断ち切れたものとして考えなければならぬであろう。

『古今集』はやはり和歌史の新しい出発点なのである。

それにしても、ふつうに掛詞といわれるたとえば「ながめ」、「ふる」といったものは、いったい何であるのだろうか。二つの語がそれぞれに利用する一つの表記なのか、一つの語から他の語を連想するための記号なのか、あるいはまた、二つの語がそれぞれに持つイメージを重ね合わせる符号であるのか。⁽⁴⁾いずれにせよ、そういう芸当は表意文字では絶対に考えられないことではある。そういう掛詞の機能をすべて『古今集』から抽出することは容易なことではない。というより、そういうことがすべて考え尽された後に掛詞なるものがあつたのではなく、いろいろな可能性をかなり曖昧なままで仮名に託したのが、『古今集』の掛詞であり、縁語であつたといえるように思う。定義はもちろん、個々の認定にもかなりの差が出るのである。殊に縁語の認定についてはいちじるしい。たとえば橋本不美男氏ら三氏の合議によって認定した『古今集』縁語歌の数は、四季六首、恋四八首、雑一〇首にすぎないが、諸注釈書が指摘したすべての縁語歌数はそれぞれ三五首、一二五首、二五首にもものぼることも報告されている。その差を縮めることは、さしあたって本稿のよくするところではない。

掛詞・縁語が、ともかくいわゆる古今的表現の中核であることはたしかである。その限り、それは時代特有の言語意識に大きく規定されているはずである。この点については梶本和喜氏の次のような考察がおおいに助けとなる。すなわち、『古今集』歌人にあつては、「ことば」ともの(こと)とが密着しているのではなく、対応関係として自覚されている」ものであることを氏はいわれる。そして、そこからする「古今歌における懸詞・縁語の特性は、「ことば」が常

に一定のことやものに対応し、それらを具体的に指示しているといふこと、及びそのことに対する楽天性を背景に持つ。」のだとされる。だから『古今集』の掛詞とは、二つの意味を「平行」させるものなのであり（二元性）、縁語とはそれを一首全体に及ぼして一首に二つの文脈をさえ「平行」させるものとされるのである。

（菊地靖彦「掛詞・縁語―『古今集』におけるその様相―」による）

C
ア
うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ

現実には人目を忍んでおいでになれないこともございましょう。しかし、夜の夢路でまで人目を避けて、私の夢の中に訪れてくださらないと思うと、私は悲しいのです。

秋風にあふ田の実こそ悲しけれわが身むなしくなりぬと思へば

秋風に遭う田の実、稲は悲しいものだ。秋の暴風で実が駄目になってしまふことを思うと。同じように、あの人に飽きられると、私が頼みにしていた気持も無駄になって、私自身がむなしくなってしまうと思うと悲しいことであるよ。

（新編日本古典文学全集による）

〔注〕小説——対談の発言者である高樹のぶ子の小説「小説小野小

町百夜」。

詞書——和歌の前書きとして、歌の背景を補足的に説明した
もの。

縁語——一つの言葉に意味上関係のある複数の言葉を使って

歌全体に多義性をもたせる和歌の技巧の一つ。

上代——日本文学の歴史で奈良時代頃までの区分。

淵源——物事の起こり始め。根源。

〔問1〕 Aの中の——を付けたア、エの「の」のうち、他と意味・用

法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕⁽¹⁾最後には直接的に詠んだほうが伝わると、小町なりに学んだ
んじゃないかなという気がしました。について説明したものと
して最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 奥ゆかしく控えめな歌よりも、晩年は技巧的で豊かな教養があふ

れる歌の方がより高い評価が得られることを学んだということ。

イ 表現技法の極地に到達したが、晩年は『古今集』に選ばれるよう

に編纂者の意図に合わせた歌を詠むようになっていったということ。

ウ 気持ちをそのまま詠む歌や作りこんだ技巧的な歌を経て、晩年は
感情を率直に表現した方がよいということを学んだということ。

エ 豊かな感情を素直に表現する技法を用いていたが、晩年はパターン
化された恋の歌を詠むようになっていったということ。

〔問3〕 Aでは、ただぼんやりわかるのは、多分、掛詞が多用されて

いくのは、明らかにひらがなの発達したときに、仮名文字が使われたからです。とあり、Bでは、いずれにせよ、そういう芸当は表意文字では絶対に考えられないことではある。とあるが、

A及びBで述べられた、掛詞の特徴について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 漢字だけではなくひらがなが発達したことにより、ある言葉で次の言葉を引き出す掛詞が盛んに用いられるようになったということ。

イ 表意文字である漢字だけでなく表音文字であるひらがなが発達したことで、一語に複数の意味を持たせる掛詞が発展したということ。

ウ 表意文字である漢字は文字から様々な意味を連想させるが、表音文字であるひらがなは言葉のイメージを固定させるということ。

エ ひらがなの発達により漢字がいくつもの意味を持つようになり、複雑な心情を表現できるようになったということ。

〔問4〕 小島さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 高樹さんの発言を受け、話題に取り上げていている小野小町に対する自説を展開することで、対談の内容を深めようとしている。

イ 高樹さんの発言を受け、異なる視点からレトリックに関する具体例を示すことで、話題の転換を図ろうとしている。

ウ 高樹さんの発言を受け、話題となっている六歌仙のうち一人に絞ることで、新たな論を展開しようとしている。

エ 高樹さんの発言を受け、六歌仙を論の中心にしようとする主張に反論することで、話題を引き戻そうとしている。

〔問5〕 Cの中の――を付けたア～エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で

答えよ。